
スキップグロウ

K O U

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スキップグロウ

【Nコード】

N1938BA

【作者名】

KOU

【あらすじ】

王として生まれた人間は、全ての他者を弄び、王として生まれた人間は、世界の為に自分を殺す。そして王を狙う一筋の毒矢は、標的を愛し己を呪い、全てを見通す観察者だけが、その結末を知っている。『救世主』と『魔王』が出会う物語。

王の采配

何気なく捲った資料を見て、俺は目を見張り、喉の奥から変な音を漏らした。

「……おいおい、マジかよ」

学年主任の机の上から拝借した、今度自分のクラスにやってくる転校生の資料。その顔写真、そして氏名、経歴。

人違いのはずが無い。ある病院の一室で、大きな産声を上げたその瞬間すら、俺は覚えている。ああ、それこそ両親と同じ位に。ハッピーハレルヤ。絶望よ、ようこそ。その産声に、戦慄と、ある種の諦観と、そしておぞましいことに、一かけらの喜びを覚えて。

「何つう『捻じ曲げ』方しやがる……。いよいよ、俺の身が危ないか……。？ いや……。」

それまで目を通していたファイルの上に、資料を投げ出す。ファイルと資料の顔写真が2枚、机の上で並びあった。片方は目も眩むような笑顔で。もう一人は心穏やかで無くなるような無表情で。

「参ったねこりや。『救世主』が『魔王』に喰われちまう」

顎の無精ひげをざらざらと擦り、額に浮いてきた冷や汗を拭いた。ひどく体が冷えていた。

++++++
++++++

人間の人生は何を持って決まるのか？ああ、そこにはたくさん
の答えがある。身分？容姿？性格？資質？それとも、予め決められた道
を辿るような、運命？

ああ、下らない。私は、その答えに答えてあげることが出来る唯一
の存在。

旧校舎の裏という、何の面白みも無いところに呼び出された私の前
に、サッカー部のキャプテンだという男が立っている。顔は真っ赤
に蒸気し、微かに肩が、足が、握りこんだ掌が震えているのが分か
る。私の視線を真正面から受け止め、その振動が更に増した。そん
な様子は酷く愛おしく、そして酷く滑稽だった。

「せ、瀬名さん」

きつと立っているのも辛いだろうに、必死にこちらを見つめてくる
男に、私は場違いにも拍手を送りたくなった。過剰な恋慕は崇拜で
あり、彼はすでに私にかしづく奴隷のようなものだった。彼は今き
つと、膝を折って地面に頭を擦りつけたいと本気で思っているだろ
う。そしてそれを異常だと分かっている、必死でその感情を抑え込
んでいるだろう。何て健気なことだろう。だから私は、彼の呼びか
けに微笑で応えてやることにした。

その瞬間、男の喉が鳴り、生唾を飲み込んだことが分かる。本人で
さえ恐怖するような歓喜が、全身を駆け巡っているだろう。それは

恐ろしい程に。

「こ、ここ、こんなところに呼び出して……呼び出してしまうてすみません。ただ、どうしても伝えたくて……。あ、あの俺……」

何も聞かずとも分かっている。私のことが欲しい。狂おしい程の劣情を催している。そして今、彼は新たな感情を私に感じている。自分は何を考えていたのだろうと。今、この瞬間まで、私を何という身の程知らずな対象として見てきたのだろうと。

「俺……あなたの……あれ、俺は……何ていうことを……。俺……」

「いいの」

私は一言発した。目の前の男が、雷に打たれたように体を震わせた。実際、それは誇張では無かっただろう。彼は天啓という雷に打たれたのだ。そう、私の声は。

「いいのよ、新庄君」

「あ、あ……。俺、俺の名前を……」

彼は歓喜に身を震わせ、次の瞬間自分の身に起こったことに驚愕した。彼は必死に顔を拭う。どうしたことが、彼の瞳からは涙が止まらない。本人の意思と関係無く、壊れたように涙が頬を伝っていく。それは喜び。魂の震えから来る、感情の奔流だった。

「あなたの気持ち、とても嬉しい。私……」

そつと手を差し出す。もはや震えを抑えきれない彼は、はじかれた様に膝を折って、首を垂れた。まるでそうすることが予め決められていたように。ああ、運命なんてものがあるのだったら。私は笑みを浮かべる。それはきつと今彼の前に立っている。

「新庄君。私を守って。私の為に戦って、生きて、そして死んでほしいの」

「ああ……俺、俺は……」

彼は恐る恐る私の手を握る。手が触れた瞬間、彼は大きく仰け反って、そして……。

「……そ、そつかあ。やつぱり君みたいな可愛い子、俺じゃ不釣り合いだね。うん、でも告白したら何かすつきりしたよ。ありがとう。……良かったら友達ではいさせてくれないかな？」

何事も無かったように穏やかに微笑む彼に、私は今度こそ満面の笑みを浮かべた。

「ええ、勿論」

寂しそくに、そして少し嬉しそくに微笑んでその場を立ち去った彼の足音が聞こえなくなるまで、私はその場に立ち尽くしていた。

この高校に来て、2か月。正面を切って告白してきた人数は何人だっただろうか？彼は私に随分と熱を上げていたようだ。かなり深いところまで『刻む』ことが出来た。

「……あの子はどの『駒』にしようかなあ……」

……人間の人生は何で決まる？私はその答えを知っている。答えは「他者」。

そして私は王。全ての他者を統べる者。この世界で、唯一にして絶対の存在。

あの子はいい駒になる。私は機嫌を良くすると、メロディを口ずさみながら校舎へと歩き出した。

王の嘆き

覚えてる。覚えている。全てが間違っている歪んだ世界の中で、その光は包んでくれた。優しく、優しく包んでくれた。その声を聞いた。温かく、優しく。

++++++
++++++

いつの頃からだっただろう？自分の存在に気付いたのは。私は、この灰色の世界で、唯一の黒で、白なのだと理解したのは。「正義」とか「悪」だとか「倫理」だとか「欲望」だとか。そんなものでは量れない「支配」を、自分の身の内に感じたのは。

それをはっきりと自覚した時、私の中に生まれた感情は、それは「嘆き」だった。己の存在を嘆いた。だって、私は……。

「ねえ、弥子^{やい}。……さっきどこ行ってたの？」

後ろから声を掛けられて、振り向くと同級生の一瀬七海^{いちのせななみ}が、意味ありげに笑っている。その瞳の奥に宿る感情を、心地よく思いながら、微笑み返す。

「サッカー部の新庄君がね、お友達になりましたよって」

私の返事を聞くと彼女はおどけたように、呆れたように天井を仰いだ。

「……つかー！学園のマドンナにとうとう学年一のイケメンまで玉砕かあ。まあ、遅い位だね。これで何人目……だっけ？」

一瀬七海はすぐ傍にいた井上彩いのうえさやに話を振った。彼女は少し考えるように唸ると、恐る恐るといった感じで答える。

「……えっと、さ、30人以上？」

弛緩しきつた空気が辺りに漂う。それは諦観に似ていた。理解は出来る、でも納得がいかない……。彼女たちの心の声が空気を震わせて、その色を少しだけ変えているようだ。

無理もないだろう。私に惹かれて導かれるように集まってきたこの子達は、私自身が「采配」を施した子達ばかりだ。本来なら、学校中の異性を虜にするのはこの2人のはずだったのだから。でも、だからこそ、私の隠れ蓑になってくれる。

一時期は酷かった。私がこの学園に姿を現すと同時に、男達は（そして何人かの女達も）私に群がってきた。慕い、渴望し、欲情してそれは仕方のないことだ。特にこの年頃、高校生という思春期の不安定な時期にあつて、彼らは、あるいは彼女らは無意識のうちに支配し、支配されたがっている。自己すら飲み込む、圧倒的な存在。

そんな脆弱な同級生たちを見るのは慣れてはいたけれど、少しだけげんなりして、私は彼女たちを見出したのだった。自覚はしていないだろうけれど、一瀬七海も井上彩も、私と出会ってから著しく人間として完成されつつある。あるいは清純に、あるいは妖艶に。

異性を、同性ですら惹きつけ、目を逸らせなくする魅力を持ち始めている。それはそうなのだ。「王」を守る「臣下」は、望まずともその恩恵を受ける。

だからといって私はこの2人を「服従」させているわけではない。手の届くところに置いただけだ。2人は私の言葉に対して必要以上の反応を見せることは無い。従順な下僕は必要だけれど、日常生活の中で接するには彼らはあまりにも味気ない。それは経験から学んだ判断だった。ただのイエスマンばかりを侍らせても、退屈は埋まらない。

一瀬七海。快活で明るく運動神経が万能。女子剣道部のエースであり、同性からも人気が高い。

井上彩。性格はお淑やかで、男女分け隔てなく接するその姿はまさに大和撫子。その容姿から根強い人気を持ち、彼女が所属する茶道部は文化部でありながら異常な部員数を誇る。

そんな2人は誰よりも私を理解し、私を見守り、私を大切に思い、そして。本人達も気づかない程深い深い心の奥底で、憎んでいる。

私は2人を愛しいと思う。いつか後ろから、私の首筋に刃を向ける2人を想像すると、それだけで私は頬が緩むのを抑えられない。有能過ぎる「臣下」は「王」の立場を脅かそうとするかもしれない。私はそれを待っている。

自らの立場を忘却した下々の者こそ、「屈服」させる甲斐があるというものだ。それは完全な支配。私は欲望に塗れた視線で2人を見つめる。

「私は、2人がいればそれでいいの」

その瞬間一瀬七海は目を見開き、井上彩は恥ずかしそうに目を伏せ

た。2人ともみるみるうちに頬が紅潮していく。

「……本当に弥子はずるいね、そんなこと言われたら何も言えないじゃん」

悔しそうな声色で、そして嬉しさを隠しきれない表情で、一瀬七海が抗議する。

「……わ、私も……弥子ちゃんと、七海ちゃんが居てくれば、それでいい!」

勢いよく顔を上げると、掴みかかるような勢いで井上彩が身を乗り出してくる。

「ちょ、彩!?!」

私は微笑む。私は2人を愛している。2人の中で育つ、私への愛を愛している。

そして決して消えず燦り続け、いつか2人の身を焦がす私への憎悪を愛している。

「王」は愛され、憎まれる。けれど「王」には愛しくない。それが私にとっての「嘆き」の1つだった。

王の渴望

世界の真実を知った時、自分の胸に湧きあがったのは憎悪だった。世界から赦されたというその存在を憎悪した。それはきつと、自分の存在意義からくる本能に近い感情だったのだろう。それでもはつきりと自分自身の心で、その存在を憎悪した。在るがまま、在るだけで全てを捻じ曲げ、支配する存在。この世の全ての人間達の意志を、自由を、弄ぶような邪悪。

赦せるはずが無い。それは誓いだった。一人の人間としての、魂の咆哮だった。

『魔王』。

その「支配」から、この世界全ての人たちを救える、唯一の存在が自分だった。

自分の役割。それは「毒矢」。『魔王』を倒すのは正義の刃では無い。暗闇から放たれる、悪意の塊なのだ。

++++++
++++++

「転校生？」

何も知らなかったような声色で、全てを知っている私は一瀬七海の方へ顔を向けた。

高校1年生の1学期、それも6月という中途半端な時期にやってくる転校生の存在は、従順なクラスの担任、荒井仁あらいじんが喜び勇んで知らせてきた情報だった。

その訳ありげな転校生の名前は大屋鳥 直光（おおやどり なおみつ）。

全てを支配する私でも、予期せぬ『王の采配』が起こることはまああった。それは引力みたいなもので、月に導かれる潮のように、静かに、それでも圧倒的な力を持って、私の前に現れるのだ。そして予期せぬ『采配』がもたらすものは、尋常では無い『力』を持つ者。

私は期待に胸を高鳴らせた。新しい「臣下」となる資格を持つ者が現れるかもしれない。

出来れば……。目の前の2人、一瀬七海と井上彩を見つめながら思う。彼女たちよりも私を深く深く、憎んでくれないだろうか。

「そう、えつとね……。何だっけ。結構珍しい苗字。えーっとおおや……おおや何とか」

興味があるようで無い様子の一瀬七海がそう呟くと、井上彩が可笑しそうに笑う。

「もうやだ七海ちゃんたら。大屋鳥君だよ。確かに珍しい苗字だけれど」

「大屋鳥君……か。どんな子なのかな？」

私が呟くと2人は顔を見合わせる。やがて一瀬七海が遠慮がちに訪ねてきた。

「え、えー？何なに、弥子気になるの？転校生のこと」

本人は気が付いていただろうか？少しだけ、ぐらりと瞳が揺れたのを。ややあつて井上彩が追従する。

「弥子ちゃんが男の子に興味持つのって、珍しいね？」

何気ない風を装つても私には分かる。決して同性の友人には向けられるはずの無い感情が言葉の内に混ざっていた。それは嫉妬。愛するものを奪われることへの恐怖。少しでも私の関心を自分に向けたいという焦燥感。ああ、何て愛らしい子達なんだろう。一途で、どうしようもなく愚かな子達。

「そう？そうかもね。……カッコいいといいなあ」

今度こそ2人の瞳の中に、はつきりと嫉妬と欲望の炎が燃え上がったことを確認すると私は満足げに微笑んだ。2人は表情を一瞬強張らせ、そして目に見える位動揺し、そして何とか立ち直すことに成功したようだ。

「……あつはつは！！こりゃ転校生もかわいそうだわ！ことごとく学園のイケメン達をつってきた弥子のお眼鏡に敵うかどうか」

「弥子ちゃんに釣り合う男の子でしょ……。ちょっと想像できないなあ」

だから、弥子。私を選んで。

私の中でぐるりと何かが動いた。それは世界の歯車だったのかもしれないし、私自身の欲望だったのかもしれない。愛おしくて、愛おしくて。私は2人に欲情した。

「ふふつ、言ってみただけよ」

2人の中で燃え上がる炎が瞬く間に底へと沈んでいく様子を、惜しみながら見つめる。危ない、危ない。火遊びは過ぎては身を滅ぼす。それは王である私でも、例外ではない。

動き出した歯車は、世界を廻す。騒がしい朝の教室のドアが静かに開けられ――。

「……………！！！！！」

教室に居た者全てが息を呑んだのが分かる。そう、信じられない事に。私ですら。この私ですら一瞬視線を奪われた。

「……………おいおい、お前ら怖いぞ？大屋鳥がびっくりしてるじゃないか」

担任の荒井仁がさあ、入れと背中を押した少年が、教室の黒板の前に立つ。

「はじめまして。神戸から引越してきました。大屋鳥直光といいます。中途半端な時期の転校ですけど、皆と仲良くなればなっと思っています。よろしく」

そう言つて頭を下げる彼を全員の目が追った、おじぎに合わせてさりと艶やかな前髪が垂れ、男とは思えないほど長い睫が影を落としたのが見えた。すつきり通った鼻梁。強い意志を感じさせる瞳。色香さえ感じさせる唇。その全てが完璧なバランスを保っていた。

「……あ、はは……。可愛いそう……。じゃ、ないね」

引きつった顔で一瀬七海が笑う。井上彩は彼を見つめたまま、微動だにしない。

私は。

「……どうした？瀬名」

荒井仁が怪訝な表情を浮かべ、クラスメイトの視線を集めて初めて、私は自分が立ち上がっていることに気付いた。

「……いえ、何でもありません」

席へ座ると不安げに2人が私を見つめてくるのが分かる。いつもなら、そんな2人に微笑み返すくらいはしただろう。けれど、今の私にその余裕は無かった。

久しく感じていなかった感情が頭をもたげてくるのが分かる。これは私の業。「支配者」としての、「王」としての気質。

素晴らしい。『王の采配』は最高のプレゼントを私に用意してくれた。私は顔を伏せ、抑えきれない歓喜の表情を隠した。

あれが欲しい。

++++++
++++++

教室に入った瞬間に、一斉に視線を浴びせられる。今更驚きはしない。慣れたものだ。俺がたじろいだのは視線じゃない。冷や汗が噴き出ない自分が信じられないほどだ。何てことだ。これ程のものだなんて。この教室ごともう、日常のそれじゃない。歪んでしまっている。俺は標的をばれないように盗み見た。標的は何ともないという表情でこちらを見つめている。俺が何なのか、気が付いたのか？肌が泡立つような感覚すら覚えたが、標的は興味なさ気に顔を伏せると、それきりこちらを見ようとはしない。どうやら、まだ正体がばれてはいないようだ。相手がこちらを見ないことをいいことに、つい憎悪の視線を向けてしまう。『魔王』め。汚らわしく、おぞましい。そんな姿をしていても、俺には分かる。お前の中にある『理外の獣』が、その肉を食い破って、外に出たがっているぞ。

俺を、懐に入れたな。俺は『毒矢』。お前を、決して逃がさない。

観察者の独白（前書き）

注意

この話は幕間であり、ある種のネタバレとなっております。
そういった展開こみで楽しみたい方はお読みいただければと思います。
す。

観察者の独白

……あー、あー。聞こえてるか？

うん、聞こえてるな？悪い悪い、びびるよな普通。でも落ち着いてくれよ。

あ、まずは自己紹介からだな、えつとな俺の名前は――――いいや、必要ないか。

とにかくな、別にあんたの頭がおかしくなったわけじゃあ、無い。

そこんとは安心してくれ。

あんたはネットで小説読んでただけだもんな？うん、あんたに非は無い。まったく無い。

でもな、こつやってあんたと俺が世界を超えて、つながったのも何かの縁だ。

ちよつとだけ、ちよつとだけでいいから俺の話聞いてくれないか？

俺はさ、『観察者』だ。『トリックスター』って呼び方もあるな。決して主役ではなくて、まあ、物語に張り付いてるおまけみたいなもんだな。

俺の役割は見届けること。あんたと同じだよ。決して物語を曲げることは出来ない傍観者。

でも、だからこそ、俺だけは、俺だけが真実を見ることが出来る。

だから話を聞いてほしかったんだ。今こつちはひどいことになってる。信じられないことに

高校のちっさい教室が、今じゃ『因果律』さえ歪んで捻じ曲げられちまってる。

俺が大声あげて逃げ出さないだけ褒めてくれ。常に爆弾目の前にして授業だぜ。ありえねえ。

そつさ、あんたも今見てきただろう。まさか、あいつらが――

え？

何だって？……あんた、今何で。

ああ、ちくしょう。時間だ。とにかく、俺はいつでもここにいます。

もし、この狂った『因果律』があんたと俺をもう一度引き合わせてくれるなら……！！

あんたのその誤解も、その時に解いてやる。

まあ、その時はもう、手遅れかも、しれないがな。

王の動揺

世界の壊し方は簡単だ。ただ、手を伸ばせばいい。

死にたいのだと、『彼』は言った。終わりにしたいのだと、『彼女』は嘆いた。

ただ、黙って首を振った。

そんな事は、絶対にさせない。

++++++
++++++

一時間目を終えるチャイムが鳴ると同時に、クラス中の視線が一人の男子に集中する。吸い寄せられるように、一人、また一人と彼に群がっていく。そのほとんどが女子だ。私はそんな様子を眺めつつも、彼の観察を始めることにした。

「大屋鳥君、それって地毛なの？」

一人の女子が大屋鳥直光の髪の色について触れる。彼の髪の色はブロードに近い。ただ、染め上げたものでは無いと一見して分かるような綺麗な髪色をしている。

「そうだね」

「大屋鳥君ってクォーターとか？」

「いや、違うよ。ああ、でも昔の先祖にはいたかもしれないね」

「そうなんだ？神戸に住んでたんだよね？」

「うん。その前は島根。その前は滋賀で、その前は高知」

「随分色々なところ転々としてるんだねー。お父さん転勤族？」

「まあ、そんな感じ」

大屋鳥直光は周りを囲む女子の質問に気さくに答えている。かと言って、必要以上の積極さは見せずに、質問に対しての答えを淡々と返しているようだ。しばらく黙ってその様子を眺める。

「……弥子、気になる？」

声のした方を向けば一瀬七海が体を正面に向けてこちらを見つめている。必死な表情が見て取れた。

「そんな風に見えた？」

「うん、だって何か弥子、あの子来てから様子おかしい。凄い興味あるみたい」

拗ねたような口調で一瀬七海がこちらを伺ってくる。彼女に自覚はあるのか分らないけれど、まるで恋人の目が他の異性に移っているのを咎めるような態度だった。ふとおかしくなって、思わず一瀬

七海の頬に触れる。触れた途端に一瀬七海が硬直し、目を見開く。

「だって、謎の多い転校生だもの。興味、あるわよ」

「……そ、そう」

ずっと頬を触っていると、一瀬七海の瞳がじわりと濡れていく。今にも泣きだしそうだ。私は少しだけ心配になる。「服従」させていないはずなのに、この反応は少し過剰かもしれない。本人に自覚が無いからこそ、無意識に積み重なっていく思いがあるのだろうか。今はまだ、この子をただの人形にするのは惜しい。人の心を扱うのは、容易くて難しい。

「でも、きつと七海の思っているような気持ちでは、大屋鳥君を見てはいないから」

安心して、という言葉を読み込む。同級生に告げる言葉としては不自然だろう。ただ、気持ちは伝わったらしく、一瀬七海の強張りが解ける。少し経って、はっと表情を変えると慌てたように席を立った。

「い、や。ごめんね？私何か変なこと言ったわ……。あはは……。ちよ、ちよっと顔洗ってくるー！」

止める間もなく、教室を飛び出していく。気持ちに振り回されるということは難儀なものだな、と思う。いつの間にか隣に立っていた井上彩も心配そうな表情で一瀬七海を目で追っている。

「……七海ちゃん、どうしたのかな……」

「……突然の美形転校生の登場に動揺したんじゃないかしら」

私は知らない風に呟く。微笑を貼り付けて井上彩を見つめたが、彼女は不思議そうな表情のまま、言葉を返してきた。

「美形？」

「……そう見えない？」

私が思わず聞き返すと井上彩は可愛らしくにつこりと笑ってすり寄ってきた。

「弥子ちゃんが一番美人だと思う！！」

私は少しだけ頭を抱えなくなった。彼女達は本当に私を愛してくれているが、少し視野が狭くなってきているようだ。もちろん、何も問題ではないのだけれど、世間一般的な女子の反応とは随分乖離してきているように思える。日常生活に、支障が出なければいいのだけれど。

「それに、私……」

井上彩は大屋鳥直光を見つめると、そのまま口をつぐんでしまった。その表情は微笑んだままだったけれど、不穏な空気を感じて、私は井上彩の言葉を待つ。

さつきと同じ位可愛らしく微笑みながら、井上彩は私にこう言い放った。

「少しもかっこいいと思わないけどな、あの子のこと」

++++++
++++++

私はやっぱりと一瀬七海と井上彩の誘いを断ると、放課後の教室に残っていた。グラウンドで部活に勤しむ生徒達を眺めながら、2人の反応を思い返す。

少しだけ、過剰に思えた。

私の関心に敏感に反応した一瀬七海も、敵意に近いような無関心さを見せた井上彩も、今まであんな反応を見せたことは無かった。「服従」させた男子生徒はこの教室にも3人ほどいるが、彼らの反応は更に顕著だ。初日から女子生徒に囲まれた大屋鳥直光を、羨望と嫉妬の眼差しで見つめる男子生徒はたくさん居たが、「服従」している者達は、はっきりと彼に敵意の視線を向けていた。あまりにもあからさまだったので、彼らの前での接触は断念した程だ。確かに彼らの忠誠心は、常人のそれでは無いし、彼らの世界は私を中心に回っている。彼らにとって主である私の強い関心に、彼らは気が付いたのだろう。

「臣下」の態度をあそこまで変化させる、大屋鳥直光という存在は一体何なのだろう。

私はますます興味を深くした。それに、この疑問はすぐさま解消されるだろう。

「……それで、何か用？」

声に振り向くと、教室のドアの前に、大屋鳥直光が立っていた。

「いいえ、呼び出したりして、ごめんなさい」

「別に構わないけれど……。転校初日から呼び出されるってのは、ちよつと驚いた」

「そう？大屋鳥君は、転校をよくしていたのでしょうか？初日に女の子から、呼び出された経験位ありそうだけど」

「……どうだったかな」

いたずらっぽく微笑むと、大屋鳥直光は放課後の他には誰もいない教室へと足を踏み入れた。

「瀬名さん位の美人に呼び出されたことは無いね」

「あら、もう名前を憶えてくれたの？嬉しいわ」

少しだけ言葉で刺激を与えてみる。こうして話してみても、彼の能力の高さが自然と理解できる。特に身体能力は驚異的だ。一体、どうすればこんな風に鍛え上げられることが出来るのだろうか。私は彼を思わずまじまじと見つめてしまう。何て優秀な個体なのだろう。彼が『駒』に加わってくれば、どれだけの活躍が期待できることか。

「……瀬名弥子、でしょ」

大屋鳥直光が微笑みながらまた一歩近づく。

私も微笑んで、彼に手を差し伸べる。

「大屋鳥君。私、貴方のことがとても気に入ったの。……良かったら、お友達になれないかしら？」

彼を『服従』させるのは忍びなかった。ここまで圧倒的ならば、きっと私の「臣下」として素晴らしい働きをしてくれるだろう。ただ、それでも多少は『刻む』必要がある。

私の差し出した手を眺めると、大屋鳥直光は魅力的に微笑むと、手を差し出してきた。

「もちろん。断る理由は無だね」

私はますます笑みを深くして彼の手を取った。

瞬間

「——！？っっ」

私はとてつもない悪寒を感じ、彼の手を振り払った。今は、何？ 淀んだ澱のようなものが、爪の先から這い上がるように迫ってきたのが分かる。一瞬で噴き出した汗が全身を濡らしたようだ。震える手を握り締めながら、思わず彼を見ると、彼自身も弾かれた様に手を振り払って、信じられないものでも見るように私を見つめていた。

「……お前……！？まさか、こんな……」

振り絞るように呟いた彼の顔は、先ほどの表情が嘘のように歪んでいた。はつきりと憎悪と取れるような悪意を向けられているのが分かり、私は少しだけ動揺した。この私に悪意をここまではっきりと向けてくるような人間は今までいなかったからだ。

「……毒？」

思考から生まれたものでは無い言葉が、私の口から洩れた。その瞬間、はつきりとした殺意が私に向けられた。それは形の無いものだったけれど、だからこそ圧倒的な力を持って、私に注がれようとしていた。私は大屋鳥直光を茫然と見つめた。

彼の手が再び私に伸ばされようとした瞬間だった。

一切の音が消えていたように感じていた教室のドアを誰かが開く。

私も大屋鳥直光も弾かれた様になって、ドアのほうに目を向けるとクラスの男子が見てはいけないものを見たような顔で立っていた。

次の瞬間、大屋鳥直光は物凄い勢いで教室を飛び出していった。私は固まったまま、彼を目で追う。

「……ごめん、僕何か大事なところ邪魔しちゃったかな……」

教室に入ってきた男子が恐る恐る尋ねてくる。私は自分のものでは無くなったような体を無意識に抱きしめながら呟いた。

「ううん、いいの。……大丈夫ありがとう」

助かったわ、という言葉在必死で飲み込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1938ba/>

スキップグロウ

2012年1月9日21時37分発行